

〔個人研究〕

福田会育児院創設に関する一考察

濱田由美

はじめに

明治一二年（一八七九）に創設された福田会育児院は、仏教諸宗派の協力による貧児救済の施設である。仏教の福田思想に由来して、明治九年（一八七六）に結成された福田会による福祉活動は、その後も時代の要請に応じながら、今に至るまで続いている。現在では社会福祉法人として、児童養護施設や障害児入所施設、さらには老人ホームなどと活動の場は広がっている。

明治初期の仏教界は、廃仏毀釈により大きな被害を被っていた。さらに、明治六年（一八七三）

二月に切支丹邪宗門禁制の高札が撤去され、事実上キリスト教の禁教が解かれたことも、大きな脅威となっていた。明治五年（一八七二）三月一四日に神祇省が廃され、教部省が設置されている。さらに神官と共に僧侶も教導職に任じられ、三条教則（敬神愛国・天理人道・朝旨遵守）による説教の実施が課せられることとなる。この際、教導職管長一人の設置が認められたのは、天台宗・真言宗・浄土宗・臨済宗・真宗・日蓮宗・時宗の七宗のみとされている。その後大教院が設けられ、三条教則による説教方法の徹底が図られた。大教院は、明治八年（一八七五）に真宗

が離脱したことにより解散に至っているものの、教導職は明治一七年（一八八四）まで継続されている。

もともと、明治初期に疲弊していたのは仏教界だけではなかった。人々の暮らしにも、大きな負担が強いられていた。明治六年（一八七三）七月に地租改正条例が公布され、地価の三パーセントという高い税率が課された。また、明治一〇年（一八七七）には最後の不平士族の反乱とされる西南戦争が勃発しており、膨大な戦費調達を背景とするインフレーションは、物価高騰へとつながっていった。明治一四年（一八八二）に大蔵卿となった松方正義は、経済政策の方針転換を図ったものの、事態は改善するどころか、人々の暮らしはさらに苦しさを増すこととなる。この様な状況の中、生活の立ちゆかなくなった地方の農民などが都市へ流入する事態となり、その数は日を追って増加していった。四谷鮫河橋、下谷万年町、芝新網町などは、東京の中でも特

に貧困者が集住した場所とされている。

明治初期から中期にかけて、仏教界は貧児救済や教育への関わりを増していた。この背景には、貧困者による棄児や間引きの増加があったのは明らかであるものの、事実上禁教が解かれたキリスト教による慈善活動の拡大も、大きく影響していたと思われる。福田会育児院だけではなく、明治一九年（一八八六）の小学校令により導入された小学簡易科の設置や、簡易科小学校教員速成伝習所の開設。また、貧児救済ではないものの、明治二一年（一八八八）には僧侶養成とは一線を画す、高等普通学校の設立を果たすなど、この時期仏教界は、宗教以外の活動範囲を広げている。もともと、明治二三年（一八九〇）に改正された小学校令により、小学簡易科はわずかな期間で姿を消すことになるが、速成伝習所の明治二一年（一八八八）から翌年一二月迄の会計では、既に六百円以上の資金不足が生じており、経営状況が悪化していた事実も明らかと

なっている。『教育時論』第三〇七号（明治二六年一〇月二五日付）の「社説」では、仏教徒設立の教育施設について、「其始めは、義捐金額校費を支弁して余あるが如くなりしも、我國民の癖として、一時は狂する程の熱心を以て起てども、直に倦^⑧の念を生じ易きが故に、義捐金は漸々其額を減じ、今は幾分の授業料を徴収するか、若しくは其他に之を補充するの道を求めずんば、義捐金のみにては、到底之を維持する事能はざる^③」状況にあると伝えている。明治二一年（一八八八）に開校した高等普通学校も、仏教界の協力による学校であったが、わずか三年で閉校に至っている。明確な理由は明らかとなっていないもの^④、仏教諸宗派の資金援助だけで支える経営形態では、長期的な運営は難しかったものと思われる。育兒院の場合は、僧侶であることが永続会友の条件とされていたのは、創立からわずか十年ほどに過ぎなかった。その後名望ある婦人により設けられた「惠愛部」が加

わったことで、今につながる活動に育っていったとも思われるが、各宗僧侶が協力し、福田思想による慈善事業に着手した功績は、大きなものであったのは明らかである。

福田会育兒院に関する先行研究としては、吉田久一の『日本近代仏教社会史研究』^⑤がある。当時の仏教教団と慈善活動の関係について、「廃仏毀釈後の仏教衰頹復興を慈善に求めんとする」だけではなく、「キリスト教との対抗を仏教慈善を通じて行おうとする」という二つの立場があったと指摘する。育兒院創設の直接の動機は、墮胎の防止や棄兒の救済であっても、その先にある真の目的は、「排仏後の仏教の復興方途を育兒院設立に求め、すでに社会的活動を開始していたキリスト教におくれをとるまいとしたもの」であったと考えている。さらに、福田会育兒院について、仏教的視点から言及したのは、「排仏論とキリスト教の進出に対抗して、仏教界が日本社会に築いた仏教国益運動の拠点の一つ」と

指摘した、小野文珧・清水海隆の『福田会』の研究^⑥であった。福田会の育児院史的な研究としては、滝口桂子の「明治期における福田会育児院の研究」^⑦、宇都榮子による福田会育児院に関する一連の研究などがある。さらに、近年「福田会育児院史研究会」^⑧が組織され、創設期から現在に至る迄の育児院史作成が目指されており、その成果は徐々に明らかにされている。ここでは、このような研究状況を踏まえた上で、「仏教上慈悲の旨趣に基き」結成された福田会が、福田思想実践の場として創設した育児院を、仏教諸宗派の僧侶が中心であった時期に注目し、仏教との関わりから確認する事を目的としたい。

一、育児院創設

「福田会沿革略史」^⑩によると、今川貞山（臨済宗・杉浦讓（旧幕臣）・伊達自得（国学者）の三人が、「仏教上の旨趣に基き、汎く貧困無告の児女を収

容すべき社団を建設」せんことを發議したのは、明治九年（一八七六）三月六日のことであった。その後、会の名称を福田会、施設は育児院とすることが決められている。会友は、永続会友（僧侶で終身この事に従う者）、通常会友（在家有志の者）、随喜会友（随意に金品を喜捨する者）と、三種に区別されていた。もともと、翌年伊達自得、杉浦讓が相次いで亡くなり、兩名が育児院創設に直接関わることはなかった。

福田会の名称は、仏典所説の三福田、八福田に由来している。「父母・国王・師長等には養育・保護・教誨の大神あり、之を恭敬して其恩に報ずるを報恩福田と為す。仏法僧の三宝に皈依し、之を恭敬して無量の功德を成就するを恭敬福田と為す。貧窮病苦怙恃する所なき者を愍み、所須の物料を給施して之を救邸するを悲愍福田と為す。此れ是を恩敬慈悲の三福田」と云う。さらに八福田は、(一)義井を穿ちて衆人の渴を濟ふ。(二)橋梁を造り往來の人を濟ふ。(三)險阻を平かに

して道路を開きて通行に便す。(四)父母を孝養して鞠育教養の恩に報ゆ。(五)仏法僧の三宝に帰依して覚岸に登る。(六)病患の人に給侍して之に湯薬を与へ安慰を得せしむ。(七)貧窮無告の人に施与して其困乏を救済す。(八)無遮会とて大法会を設けて一切の魂を度し各苦趣を離れて善道に登らしむ⁽¹¹⁾。ということになる。

福田会育兒院の仮事務所設置申請が提出されたのは、明治二年(一八七九)一月のことであつた。

福田会育兒院事務所仮設之義二付伺

今般全国各宗有志協議之上、別紙写之通規約ヲ設ケ、府下日本橋区茅場町式十九番地、智泉院へ仮事務所設置仕度於 御府庁御差問無御座候ハ、更ニ内務省へ出願仕度候間、連署ヲ以此段相伺候也、

府下小石川区表町

浄土宗伝通院住職

各宗有志惣代

借受人

明治二年一月 中教正 福田行誠 印

新潟県越後国蒲原郡国上村

真言宗国上寺住職

権中教正 大崎行智 印

静岡県駿河国安倍郡大岩村

臨濟宗臨濟寺住職

少教正 今川貞山 印

千葉県上総国長柄郡茂原駅

日蓮宗茂原寺住職

権少教正 神保日淳 印

群馬県上野国新田郡世良田村

天台宗長楽寺住職

大講義 石泉真如 印

日本橋区茅場町二十九番地

同宗 智泉院住職

権少講義 矢吹信亮 印

同区茅場町三十一番地

平民 三島善兵衛 印

東京府知事 楠本正隆殿⁽¹²⁾

その後、同年四月には「福田会育児院設置願⁽¹³⁾」を内務省に提出しているが、その際の文面には「貧童教育仕度」の文言が書き加えられており、福田会育児院の設立目的が、貧児への目の救済だけではなく、その後成長した貧児たちの生きる糧として、教育にも重きを置いた施設であったと思われる。「福田会育児院設置条目⁽¹⁴⁾」にも、「此ノ養育院ハ、幼稚ニシテ父母ヲ失ヒ、或ハ貧窮ニ困セラレ、養育能ハザル者ヲ此ノ院ニ入テ教育シ、其ノ厚德深智ヲ発達セシメンコトヲ冀望ス、故ニ実施ヲ確定シ要領ヲ陳列セリ」と記されている。

「福田会規則⁽¹⁵⁾」によると、この会の趣旨に賛同して参加した発起永続会友の僧侶は、真言宗九名、天台宗八名、臨済宗七名、日蓮宗五名、時宗四名、浄土宗三名、曹洞宗一名の総勢三七名であり、真宗からの参加を確認することはなかった。

明治八年（一八七五）に真宗の離脱により、大教院は解散に至っている。同年一月には、「僧侶

之弊害ヲ除キ、仏法有益ヲ興ス」ため、「諸寺院連名建白書⁽¹⁶⁾」が、福田行誠（浄土宗、新居日薩（日蓮宗）、密道応（真言宗）、諸嶽奕堂（曹洞宗）、荻野独園（臨済宗）の連署を添えて、政府に提出されている。これらの状況からは、当時真宗と他宗派が、軌を一にした活動をおこなっていないかったのは明らかであり、真宗が福田会の活動に加わらなかった理由も、このあたりにあったと思われる。もっとも、新居日薩の記録によると、明治十二年（一八七九）一〇月一五日付の、三村日修師への書状の後に、「第一紙外欄」として「真宗より五百円育児院へ寄付被下候⁽¹⁷⁾」の記述が残されており、真宗も育児院に関心を寄せていたとも思われるが、この真偽については今後の課題としたい。

内務省から育児院設置許可が下りたのは明治一二年（一八七九）四月一八日のことであり、実際の開設は同年六月一六日であった。

福田会育児院、本年四月中内務省御許可二付、

右事務所の義、日本橋区茅場町貳拾九番
地智泉院二において、今十六日開設仕度間、
此段御届申上候也、

福田会育兒院会長

権大教正 新居日薩 代理

幹事

明治十二年六月十六日

少教正 今川貞山 印

東京府知事 楠本正隆殿⁽¹⁸⁾

会長となつた新居日薩の、育兒院創設への思
いが垣間見える記述が残されている。

育兒院の事は何分御配慮を以て、寺院は勿論
在家信徒にも、精々御説諭勸奨被下度奉願候、
現今の餓鬼道を救上げ、天上人間より已上
の人と相成す真実の事觀の修行即兼行六度
の品位に相進候事に候、耶蘇宗の育兒院救
貧会等は既に設立に相成居り皇国人を救済
候也、然るを内国人にして之を坐視するは
皇国の大恥と確信候、況や教法社会の人に

於て之を苦思せざるは、教法の本意を弁知
せざる者と謂へし⁽¹⁹⁾、

これは、八月一三日付の三村日修師宛書状に
記されたものである。貧兒救済の必要を認識し
ながらも、一方でキリスト教による育兒院が既
に設立され、日本人が救済されている事への強
い危機感が垣間見えている。この背景にはキリ
スト教が貧民救済や教育を通じて布教拡大につ
ながっている事実があつたと思われる。『明教新誌』
第一一五七号（明治一四年五月二四日付）の「寄書」
にも、次の記述が残されている。

彼の外教々師は子弟の教育を専らにし且つ
貧民救助を勉めたり其子弟の教育や是れ他
日布教の基礎たるなり其貧民の救助や人心
固結の基礎たるなり吾仏教々導職は然らず
徒弟の教育其道やゝ立てるに似たりと雖未
た彼が如く懇篤親切なることを得ず⁽²¹⁾

廃仏毀釈により疲弊した仏教界が、体制強化
を目指さざるをえない時期に、敢て諸宗派協力

による貧児救済事業に着手した背景には、キリスト教が慈善活動を通じて、布教の拡大を図っていると思われる状況が、大きく影響していたのは明らかである。明治二年（一八七九）一月、育児院事務所仮設の申請をしたのと同じくして作成された、「福田会育児院設置広告文」にも同様の記述が残されている。

嘗テ聞西洋開明ノ地早ク育児院ノ設立アリト、是ヲ以テ近コロ洋教ノ人吾カ郷党ノ育児ニ着手スルヲ見ル、他方ノ人猶好心アリテ吾カ窮厄ヲ救フ、吾党内国ノ人ニシテ茫乎トシテ視テ見ザルガ如ク聴テ聞カサルガ如クスルコトヲ得ンヤ、⁽²¹⁾

育児院を創設させたのは、諸宗派の僧侶たちである。子供の養育経験は皆無であつたと思われるが、資金協力だけではなく、福田行誠師五名、新居日薩師五名、今川貞山師三名など、それぞれ貧児数人ずつを、私費を投じて信徒や里親に託すなどの活動もおこなつていた。⁽²²⁾ 育児院の維

持費は、会友からの寄付だけではなく、慈恵金の募集も実施されており、資金管理は第一国立銀行と三井銀行に託されていた。この背景には、育児院の会計監督委員に渋沢栄一、益田孝、三野村利助、福地源一郎、渋沢喜作、大倉喜八郎が名を連ねていたことが、大きく影響していたと思われる。また、慈恵金募集のため作成された「福田会慈恵金送附手続告白」⁽²³⁾の冒頭には、「此福田会ハ、諸宗教導職相会盟シテ捐資ヲ募リ、以テ育児院ヲ開弁スルカ為メニ設クル者ナリ」とある。作成されたのは、明治二年（一八七九）五月のことであつた。この時期既に大教院制は廃止となつていたものの、未だ各宗僧侶たちは教導職の立場にあり、その僧侶たちが仏教的慈善活動の場として創設したのが、福田会育児院であつたと思われる。

育児院は施設維持のため募金活動をおこなつていたが、創設の翌年二月には、明治天皇より五百円の下賜金があつたとの記録が残されている。

十二日 福田会育兒院開設の趣旨を聞召され、特旨を以て金五百円を同院に賜ふ、院は之れを東京に設け、有志の釀金を以て広く貧兒を養育するを目的するものにして、大教正新居日薩を会長とし、去歲四月内務省の許可を得、六月其の事業を開始す、⁽²⁴⁾

その後も度々皇室からの下賜金が記録されているものの、経営は万全と言える状況になかったと思われる。『明教新誌』第二一三六号（明治二〇年一月一〇日付）には、「福田会育兒院惠施箱⁽²⁵⁾揭示廣告」が掲載されている。

福田会育兒院といふは、極貧家の父母死して養ふ人なき赤子より、六歳までの稚児を救ひ上て、養育する所なり、今この会のために各宗の大徳と共に計り、恵施錢箱を各宗寺院の本堂及び參詣所に掛く、因てハ檀家の葬式及び年忌追善の度、參詣の施主ハ、此箱に金一錢又は、其志だけ投入玉ハゞ、本院赤子の養育金となりて無量の功德とな

らん、

東京本郷区龍岡町三十番地福田会育児院

會長 新居日薩

幹事 今川貞山

同
吉堀慈恭

同
佐竹徵禪

同
大矢鄧嶺

明治十九年十月

議長 高志大了

議事 在田彦龍

同
神保日淳

岡田循誘
同

同
小林仙眼

各宗寺院
各位御中

檀家信徒

様々な工夫をおこなってはいたものの、経営は決して順調とは言えなかったと思われる。「院規の修正職員の更迭あり。会友の募集、慈善の勧誘、孜孜経営に懈らざりしも、院務兎角に新

興の勢なく、時勢の氣運に従ひ、刷新改革の已む可らざるに至れり⁽²⁶⁾」との判断によつて、婦人の団体である「恵愛部」が設置されたのは、明治十二年（一八八九）のことである。この「恵愛部」設置により、それまで僧侶であることが条件の一つとなっていた永続会友は、寄附金額に応じたものに変更されている。永続会友（一時に二十円以上を納め、終身本会の目的を賛成する者）、通常会友（月十錢以上又は年一円以上納め、本会の目的を賛成する者）、随喜会友（随意に金員又は物品を納め本会の目的を賛成する者）と、それぞれの条件が定められている。また、「福田会恵愛部創立趣意⁽²⁷⁾」には、次の記述が残されている。

明治十二年に福田会育兒院を創立して貧兒孤兒を養育するもの今に至るまで凡そ二百余人、淨財の積みて現在に存するもの貳萬円余あり実に近世の美事と謂ふべし妾等随喜の余り慈に婦人恵愛部を設けて朝野の閭閻を協同し更に慈恵金を募りて此の育兒院

を拡張し兒育の事務を管理し兼て夫人の徳育を振ひ起さん為めに月並数回の法筵を開き諸宗の碩徳を講じて甘露の法味に霑はんとす、

これまで、都合により一時中断していた、明治十二年（一八七九）七月から続く法話会も、「恵愛部」の設立と共に再開されている。

会友条件の変更により、「恵愛部」の設立以降徐々にはあるが、僧侶との関わりは薄れてゆくことになる。⁽²⁸⁾創設以来会長の職を務めてきた新居日薩は、明治十二年（一八八九）一〇月の育兒院規則改正の際に実施された役員改正で辞任している。その後会長職は瀧谷琢宗、高志大了と引き継がれたものの、明治二五年一月には伏見宮文秀女王が名誉会長に就任することとなる。もともと、法話会を再開するなど、「仏教上の旨趣に基き」結成された福田会の基本理念はそのまま引き継がれていったと思われるのであり、それまで仏教界内部からの資金協力と、

募金などを主な資金源として維持されていた育兒院が、大胆な組織改革を実行したことで、結果として現在に続く息の長い活動につながっていったのは明らかである。

二、福田会育兒院説教録

次に記したのは、明治八年（一八七五）一月に左院に提出された「諸寺院連名建白書」⁽²⁹⁾の一部である。

聖徳太子、施薬院、療病院、悲田院、敬田院ノ四箇院ヲ立テ玉ヘリ、コノ中ニ、療病院ト施薬院トハ是レ病院ナリ、悲田院トハ是レ貧院ナリ、何ヲ以テ知ルトナレハ、悲田トハ仏教ニ立ルトコロノ三田ノ一ナリ、貧院ヲ悲田院ト名ルコヘンハ、愛スル心ノ甚キヲ悲ト名ク、田ハ物ヲ生スル義ナリ、故ニ貧民ノ苦シムヲ見テ、愛愍ノ心ヲ生スルコトハ、喩ヘハ、田ノ上ニ五穀ヲ生スル

カ如クナルトコロヲ悲田ト名ク、

仏教は聖徳太子の頃より、施薬院や療病院、悲田院や敬田院などの施設を設けてきた。中でも療病院と施薬院は病院のことであり、悲田院は貧院のことである。貧民が苦しむ姿に愛愍の気持ちが生じることは自然のこと、その人たちのための施設を悲田院と名付けたとする。さらに、

問、古ノ僧如此橋ヲ架ケ道ヲ造リ、渡シ舟ヲ儲ケ、義井ヲ堀リ、堤塘ヲ築キ、險難ノ地ヲ平ケ、貧民ヲ救ヒ、危難ヲ扶ケ、病民ヲ拯フ如キハ、釈迦ノ教ニヨリテ致スコトナリヤ、又私ニイタスコトナリヤ、答テ曰ク、是レミナ一トシテ、私ニ致スコトにアラス、仏教ニ八福田アリ、コノ八福田ノ教ヘニ依テ、橋梁ヲ架ケ、道路等ヲツクレリ、ソノ八福田トハ、

一、曠路義井 二、建造橋梁 三、治平險阻 四、給事病人 五、救済貧民 六、孝

養父母 七、恭敬三宝 八、設無遮会

コノ八事ヲ行ヘハ、未来ニ至テ、コノ八事
ヨリ幸福ヲ生スルコト、田ヨリ穀ヲ生スル
カ如クナルユヘ、之ヲ八福ト名ケ、

この「建白書」は、廃仏毀釈により疲弊した
仏教諸宗派が、八福田の教えを共通理解として、
仏教の存在意義を明確化させるために作成し、
提出されたものであったと思われる。伝来から
千有四百年に及ぶ仏教が、「僧徒ノ時弊彌々盛ニ
シテ、ソノ勢ヒ己レヨリ排仏免カタシ」状況に
ある。排仏が国家にとって如何に憂慮すべきも
のであり、仏教が如何に有益なものであるか訴
えたのであり、この際に連署した浄土宗、日蓮宗、
真言宗、曹洞宗、臨済宗が共に協力し、創設し
たのが福田会育兒院であつた。

明治一二年（一八七九）一月に作成された「福
田会育兒院設置広告文」の冒頭には、次の記述
が残されている。

菩薩瓔珞本業經二三聚淨戒ヲ説ク、一ヲ撰

律儀戒ト曰ヒ、二ヲ撰善法戒ト曰ヒ、三ヲ
撰衆生戒ト曰フ。此ノ中撰律・撰善ノ二戒
ハ、諸惡莫作衆善奉行ノ法門ナルヲ以テ、
各宗自行ノ方航アリテ間然スヘカラス。其
撰衆生戒ニ至テハ、実ニ四弘ノ嚆矢、六度
ノ先陣ナリ。但、境広ク縁多端ナレハ、初
学ノ菩薩較々其津ニ惑フコトアリ、吾党叨
リニ教職ノ名ヲ辱ス。蓋シ撰衆生戒ノ責ヲ
負フ任ナリ。苟モ教導職ノ懇切ヲ表スルコ
トナクンハ、果シテ尸位素饗ノ謗リヲ免カ
ル、コト得ス。吾党数十同明相会シテ撰化
衆生ノ方便ヲ談シ、遂ニ育兒院ノ法ヲ立テ、
天下ノ貧兒ヲ撫育センコトヲ決議ス。⁽³⁰⁾

三聚淨戒には撰律儀戒（惡を斷ずる）、撰善法戒
（善を實行）、撰衆生戒（衆生を救済する）の三つの
戒がある。育兒院を設立し、貧兒を救済するこ
とは、撰衆生戒に基づいたものであり、仏の教
えにかなつた活動であると伝えている。

同年七月には、福田行誡の主唱により毎月二

回法話を実施することが決められた。福田行誠、高岡増隆、多田孝泉などが交代で法話を担当している。同年一二月には説教録を印刷して、福田会の隆盛を計るため、会友その他に頒布することが決められている。

福田会育児院 説教録

大講議 多田孝泉述

こたび愛国の志いとふかくます各宗の教正君、かつ大徳たちかたみにかたらひけらく。夫僧ハ和合の義にしあれば、各宗の隔情を永くすてゝ、真心をひたぶるつくし、かたみに自行・化他の仏事をたすくべし。そにつきてハ教則の第一に敬神愛国の旨を体すべきとある。其愛国ハ何の為ぞ、是人民を愛育するが為なり。されバかたみに仏祖の大慈大悲の真心を合せ、衣鉢の淨財をかたぶけて福田会育児院を設置し、以てひたぶるに国内のまずしききはミなる人々の自力もて養育なしがたきところより、あかぬ妹

背の中に生れ出たる赤子を、山野にすつるなげきもありとしきけバ、さる貧童薄命の者を育児院へあからさまにむかひとり、当歳より六歳にいたるまで養育し、六歳より諸道諸芸を以てねもごろに教育し、男子女子とも其器にしたがひて、あるハ士農工商またハ教導職等いづれなりとも、身を立て道を行ひ、家を興して、国家の御為になりぬべきやう教育して、愛国の実効をとこしなへにおしたてゝ、教導の職掌をつくすべきなりと、有志の協議とみに一決し、其旨趣を以て天朝へこひのミ奉るところ、これは天理人道にかなひたるねぎごとなるゆえにや。（中略）国内こぞりて善友となり、国家の御為にひたぶる愛国の大善事業をなさんことをふりし

たまへかし。教育貧童の名称を福田会と名けたるハ、此育児の作善ハ我大覺世尊の説き教へたまふ広路義井と、建造橋梁と、

治平險隘と、孝養父母と、恭敬三宝と、給事病人と、救済貧窮と、設無遮会との八福田の其一なる救済貧窮の大作善にして、菩薩の三聚淨戒の中に八摂衆生戒、又五戒・

十戒の中に八不殺生戒、又六度の中に八養育ハ是財施即檀那波羅密、教育ハ是法施即般若波羅密の妙行なり。されば道俗男女とも自利利他現当二世の作善にハ、此育兒の大福田を大慈大悲の仏心を以て、ねもごろに耕すに超たる善業こそなからめ。(中略)育兒の作善ハ実に貧窮なる親子の薄命をたすけて、国家をとこしなへにりえきする愛国のつとめなれば、これはた敬神の深旨にかなひて、朝旨を遵守する各宗の一大美事といふべきものにやあらん。あなかしこ。⁽³¹⁾

当時の仏教界が、いかなる考えにより育兒院を創設し、慈善活動を実践しようとしていたのかが垣間見える内容であり、だからこそ、会友その他へ頒布されたと思われる。福田会および

福田会育兒院は、仏教の旨趣により創設されたのであり、仏心を以て福田を耕すに超えた善業はないと訴えている。

仏教といえども、宗派によつて考え方も様々であるのは当然のことと思われる。しかしながら貧兒救済という善業をおこなうためには、「各宗の隔情」をすてゝ、真心を尽くすことが目指されているが、実際には簡単なことではなかったと思われる。もつとも、ここに集う僧侶たちは、教導職に任じられた存在であつた。明治八年(二八七五)の大教院解散によつて、神仏合同での教化路線が頓挫したとは言え、三条教則(敬神愛国・天理人道・朝旨遵守)に沿つた説教実施が期待されていた。この当時、廃仏毀釈により疲弊した仏教界にとつて、天皇を主軸に戴いた国家建設を目指す新政府の支持を取り付けることは、何としても欠かせないものであつたのは明らかである。だからこそ敬神愛国を旨とし、朝旨を遵守する各宗の僧侶が結束した育兒院によつて、

薄命の親子を助けることが天理人道にかなうと訴える。さらに続く高岡増隆の法話では、貧児救済を外国人が行っている事実⁽³²⁾に言及している。

該身貧屢ニシテ、朝夕ノ織煙モ挙カヌルト云様ナル者ニ在テハ、折角己ガ産落シタルヲ、乳養鞠育スルコトガ出来ヌトテ、在留ノ外国人ニ委託シテ、其養育ヲ頼ムト云様ナ人ガ有マスガ、ソモイカナル心ゾヤ。盲亀の浮木も啻ナラヌ。我皇国ニ生ヲ受サセタル其忝サヲモ思ハズ、イカニ貧苦ニ迫レバ迎、掛幕モ恐キ朝廷ノ詔旨ニ背キ、国恩に悖戾シ、親子ノ恩愛ヲ顧ミズ、外国人ノ属隸トナシ、再び皇国ノ人民トナラレザルヲイトオシトハ思ハヌニヤ、カ、ル者往々有リト力承リマス。⁽³³⁾

暮らし向きの立たない貧困家庭には、子供を養育するための支援が必要であるとの思いから、貧児救済の為の育児院を設立した仏教界ではあるものの、外国人（キリスト教信者）による援助

には、強い警戒感を滲ませている。先の『教育時論』第三〇七号では、「総て宗教の勢力を拡張せんには、下級社会を感化するが、最軽最捷の方便なるを知るが故に、耶蘇教徒が貧民を教育するに於て、その力を用ふる事、吾等想像の及び得る所にあらず⁽³³⁾」と伝えている。多田、高岡両師の法話には、未だ宗意を自由に語れない状況の中、なし崩し的に黙認されたキリスト教の布教拡大にも、為す術を持ち得なかった当時の仏教界の言いようのない不安が、色濃く滲んでいるようにも思われる。

おわりに

明治初期における仏教界は、廃仏毀釈による破壊活動や、事実上黙認となったキリスト教の脅威などにより、それまで経験したことがないほどの危機的状況にあったと思われる。さらに明治政府の意向により、神官と共に僧侶も教導

職に任じられ、三条教則に沿った内容での説教実施が求められていた。

福田会育兒院に関する研究では、その目的を廃仏毀釈後の仏教復興と、キリスト教への対応との両側面から言及される場合が多かった。確かに当時の仏教界にとって、どちらも大いに気に掛かる問題であったのは明らかである。福田会育兒院について、仏教的視点から言及した『福田会』の研究⁽¹⁾では、「明治初期の敬神愛国の国家主義的性向とみることができる」としながらも、究極的には「国恩に報いるための愛国の事業」であったととらえている。

当時の仏教界は、声高に宗意を語ることが憚られる状況に置かれており、僧侶たちは教導職の立場での活動を余儀なくされていた。そのため、摂衆生戒に基づき仏教諸宗派が協力して、貧窮なる親子を助けることは、国益に寄与する愛国の表れであり、朝旨を遵守している僧侶たちによる福田会育兒院の創設は、まさに天理人

道にかなった活動であると、主張する必要があるのだと思われる。

註

- (1) 明治五年一〇月三日 教部省番外達（『明治以降宗教関係法令類纂』第一法規、一九六八年）。
- (2) 『明教新誌』第二七六三号（明治三年八月二日付）。
- (3) 『教育時論』第三〇七号（明治二年一〇月二五日付）。
- (4) 三宅雪嶺は閉校の理由を「一つは日薩上人が歿くなられたのによるので、控へ柱がなくなったわけで、又経営上にもまづい点があったのだらう」と、伝えている。（『薩和上人遺稿事蹟編纂会』『伝記叢書一四五 新居日薩』大空社、一九三七年）。
- (5) 吉田久一『日本近代仏教社会史研究』吉川弘文館、一九六四年。
- (6) 小野文琬・清水海隆『『福田会』の研究』（『日本仏教社会福祉学会年報』十九号、一九八八年）。
- (7) 滝口桂子「明治期における福田会育兒院の研究」（『社会福祉実践史の総合的分析』一九八九年）。
- (8) 宇都榮子「福田会育兒院創立の経緯と開設当初の組織」（『東京社会福祉研究』第三号、二〇〇九年）・「福田会育兒院創設とその後の運営を支えた組織」（『社会福祉』第五十五号、二〇一四年）など。
- (9) 野口武悟・宇都榮子・菅田理一・土井直子「福田会育兒

- 院設立初期の規程・組織等の検討」(『社会科学年報』第四十五号、二〇一一年)。
- (10) 「福田会沿革略史」(『社会福祉施設史資料集成』第一期第三卷、日本図書センター、二〇一〇年)。
- (11) 前掲書。
- (12) 「福田会育兒院事務所仮設之義二付伺」(東京都公文書館所蔵文書)。
- (13) 「福田会育兒院設置願」(東京都公文書館所蔵文書)。
- (14) 「福田会育兒院設置条目」(東京都公文書館所蔵文書)。
- (15) 「福田会規則」(東京都公文書館所蔵文書)。
- (16) 「諸寺院連名建白書」(『新編 明治維新 神仏分離史料』第一卷・総説編、名著出版、二〇〇一年)。
- (17) 薩和上人遺稿事蹟編纂会『伝記叢書 一四五 新居日薩』大空社、一九三七年。
- (18) 東京都公文書館所蔵文書。
- (19) 薩和上人遺稿事蹟編纂会『伝記叢書 一四五 新居日薩』大空社、一九三七年。
- (20) 『明教新誌』第一一五七号(明治一四年五月二四日付)。
- (21) 「福田会育兒院設置広告文」(東京都公文書館所蔵文書)。
- (22) 「福田会沿革略史」(『社会福祉施設史資料集成』第一期第三卷、日本図書センター、二〇一〇年)。
- (23) 「福田会慈恵金送附手続告白」(東京都公文書館所蔵文書)。
- (24) 宮内庁編『明治天皇紀』第五、吉川弘文館、一九七一年。
- (25) 「福田会育兒院恵施箱掲示広告」(『明教新誌』第二二三六号、明治二〇年一月一〇日付)。
- (26) 「福田会沿革略史」(『社会福祉施設史資料集成』第一期第三卷、二〇一〇年)。
- (27) 「福田会恵愛部創立趣意」(東京都公文書館所蔵文書)。
- (28) 「福田会沿革略史」(『社会福祉施設史資料集成』第一期第三卷、日本図書センター、二〇一〇年)。
- (29) 「諸寺院連名建白書」(『新編 明治維新 神仏分離史料』第一卷・総説編、名著出版、二〇〇一年)。
- (30) 「福田会育兒院設置広告文」(東京都公文書館所蔵文書)。
- (31) 「福田会育兒院 説教録」(『明治仏教思想史資料集成』第七卷、同朋舎出版、一九八三年)。
- (32) 前掲書。
- (33) 『教育時論』第三〇七号(明治二六年一〇月二五日付)。

